地域生活定着支援におけるストレングス・アセスメント方法に関する一考察
― 精神障害者との協働の必要性 ―

A Study on the Method of Strengths Assessment for the Support of Established Community Life
― The Importance of Collaboration with Persons with Mental Disabilities ―

山　東　綾　乃*

（平成29年１月18日受理）

要約

近年、日本の精神障害者支援は「入院医療中心から地域生活中心へ」という方針で進められている。そしてそこでは、精神障害者のもつ強みや資源をとらえるストレングスの視点が重要となる。しかし現実には、地域生活定着支援でストレングスを活かす具体的な方法がなければ、彼らが自分の強さや地域にある資源をうまく活用して地域生活を続けていくことは困難である。それゆえ本稿では、彼ら自身のストレングス活用を効果的かつスムースにする地域生活定着支援方法を、アセスメントを糸口に検討している。具体的には、情報収集や状況理解の局面であるアセスメントのなかで、精神障害者と支援者が協働する固有な支援方法構築の必要性を提唱している。

キーワード：ストレングス・アセスメント、地域生活定着支援、協働
keywords：Strengths Assessment, Support of the Established Community Life, Collaboration

１．はじめに

日本の精神障害者支援では、「入院医療中心から地域生活中心へ」という流れのなかで、とくに近年、地域移行・定着にかかわる法制度や施策の整備が行われてきた。しかし現実には、精神障害者が仮に退院できたとしても、服薬の中断による疾患の再発で入退院を繰り返すケースや、地域とつながらず病院と自宅の往復のみで生活を送るケースも少なくない。こうした現状の要因には、まず多くの精神障害者が病院から退院する段階で抱える課題がある。しかし、それ以上に、彼らは地域生活を継続していく段階に難しさに直面している。こうした状況に対して現状の支援では、移行後の地域生活に必要な医療・保健・福祉サービスの提供体制などハード面での支援が整備され、それらを個別状況やニーズに応じて精神障害者本人につないでいくソフト面の支援が拡充されている。しかしその一方で、支援が精神障害者の地域生活定着に結びついていないのは、そこに本人の強さや地域にある資源が不可欠であるにもかかわらず、そのことを彼ら自身が認識し、継続的に活用できていないことの影響が大きい。つまり、現状のソフト面の支援には、精神障害者の潜在的な強みや地域社会の力を包括的にみながら、それらを彼ら自身で活用できるよう働きかける視点が欠如しているのである。このことをふまえると、そこには必要な地域資源の量や種類を確保するだけなく、本人の力や地域のフォーマル、インフォーマルな資源の強みを引き出し、それらを地域生活定着の段階や変化に沿って精神障害者自身が選択し活用できる継続的な支援が必要不可欠と考えられる。

そのため、これまでの研究では、単なる地域での定住や生活の維持でなく、精神障害者本人の力や地域資源などのストレングスを活かした主体的な地域生活の継続を目指す、地域生活定着支援の

（＊さんとうあやの　兵庫大学短期大学部非常勤講師　ソーシャルワーク）

必要性を主張してきた[*1)]。具体的には、ストレングスが地域生活定着支援において、成長や目標達成の可能性を生み出す精神障害者本人の力や資源を包括的に理解するうえでの一助となる概念であるとともに、彼らとの対等な関係のなかでその強みを引き出し認識していくための言語や指標となりうる概念であると指摘してきたのである。しかしながら、そこでは地域生活定着支援におけるストレングスの視点を対象や目的に合わせて柔軟に活用していくための方法構築が課題として残された。そのため本稿では、まずソーシャルワークにおいて情報収集や状況理解の中心的局面であるアセスメントを糸口に、さきの課題を解決する支援方法を考えていきたい。それは、ソーシャルワーク実践におけるアセスメントが、利用者の生活問題の解決にむけ支援を進めていくための情報認識プロセスであり、効果的支援にかかわる計画や介入に影響を与え、利用者中心の支援展開を促進する重要な局面であるからである。また、ソーシャルワークの展開プロセスにおいて、ストレングスを引き出す中心的な局面がアセスメントであると指摘されていることも、本研究を進めていく理由である[*2)]。

そこで本稿では、現状のストレングス・アセスメントの問題をふまえつつ、地域生活定着支援に効果的なストレングス・アセスメント方法を明確にしていきたい。具体的には、日本の地域生活定着支援に固有な方法構築にむけて、次の４つの課題に取り組みたいと考えている。

①ストレングス支援を具現化するアセスメントの重要性
②ストレングス・アセスメントの実際
③地域生活定着支援におけるストレングス・アセスメント実践の問題
④精神障害者との協働によるストレングス・アセスメントの必要性

２．地域生活定着支援におけるストレングス・アセスメントの重要性

⑴　実践方法としてのストレングス・アセスメントの必要性

近年、精神障害者が地域生活に移行し継続するためのハード面の支援は、整備されてきている。しかし一方で、いまだ長期入院者、施設長期入所者、再発・再入院を繰り返す人が多く存在しているのも事実である。現実に、入院期間１年以上の長期入院患者の数は、20万人以上といわれている[*3)]。こうした精神障害者の地域生活定着にかかる問題は、彼らの障害特性やそれに伴う弱さにのみ起因しているわけでない。精神疾患の罹患や入院生活によって、精神障害者が自分の強みや資源といった地域生活定着力をうまく活用できなくなっていることこそが、問題の根源的な要因となっているのである。このことから、地域生活定着支援を行う支援者には、精神障害者の潜在的な地域生活定着力を包括的にみながら、それらを彼ら自身で活用できるよう働きかけることが求められている。

そこで、これまでの研究では、この地域生活定着力をあらわす概念として、成長や変化の可能性を生み出す本人の能力や活用可能な環境の強みに焦点をあて、精神障害者の生活に対する支援者の視野を広げることのできるストレングス概念に注目してきた[*4)]。そして、地域生活定着力をより包括的にとらえるストレングスの活用には、それらの力を精神障害者が幅広く活用し、自分の望む地域生活を続けていく支援展開が可能となることを明らかにしたのである。

しかし一方で、実践のなかで支援者がストレングスを具体的に認識し、活用することは容易でない状況もある。なぜなら、そこでは支援者の経験や能力によって､着目されるストレングスの範囲、あるいは支援計画や介入場面でのストレングスの活用方法にバラつきが生じているからである[*5)]。このストレングス概念の曖昧さについては、神山裕美も、ソーシャルワーク支援のひとつの視点を提供しているにすぎないという見方を示している[*6)]。こうしたことから、ストレングス

の概念を実践に取り入れていくためには、支援プロセスのなかで精神障害者のストレングスをどのように発見し活用していくのかといった、具体的な方法や手続きが必要となる*7)。しかし、ストレングスには概念自体の抽象性の高さや、概念を用いた具体的方法の未確立といった大きな課題がある。つまりそこでは、抽象的な説明概念を具体的な実践方法に変える作業が必要になるのである。それは、限定した対象者、あるいは対象課題に対する意味や理念など実践の根拠を提供するとともに、支援の具体的な手続きを明らかにすることである*8)。

このことをふまえると、ストレングス概念にもとづく地域生活定着支援を展開するためには、支援者が精神障害者のストレングスに着目し活用して支援を展開するための実践方法の具体化が課題となる。そこで、本稿ではソーシャルワークのアセスメント方法に着目していきたいと考えている。それは、支援プロセスにおいて「情報収集と問題認識」[1]の局面であり、かつ「人と環境の全体性の理解を継続的に行う」[2]局面であるアセスメントが有効なソーシャルワーク実践の鍵であり、計画や介入と相互に結びついて情報を提供する局面であるゆえ、支援効果への影響も大きいと考えるからである*9)。

ここで着目するソーシャルワークのアセスメントは、伝統的医学に依拠した病理モデルや診断概念を中心とした過去のソーシャルワーク実践への反省を背景に発展してきたものである*10)。このアセスメントについて中村佐織は、「利用者や支援者が可能な限り情報収集を行い、その情報の幅広い共通理解をとおして援助計画や実践展開の方向性を示すような専門的判断を行う認識過程」[3]であると定義づけている。そして、彼女はアセスメントへの利用者システムの積極的な参加が、彼らにとって自身の能力を意識化し、問題解決にむけた潜在的能力や新たな能力を発揮する機会となりうると説明している。また、支援プロセスにおけるアセスメントの位置に関して原田聖子は、ニーズやストレングスを中心に利用者を理解するアセスメントの局面が、支援プロセス全体で行われる継続的な営みであると述べている*11)。

このように、ソーシャルワーク実践におけるアセスメントは、利用者の生活問題の解決にむけ支援を進めていくための情報の認識プロセスであり、効果的支援にかかわる計画や介入に影響を与え、利用者中心の支援展開を促進する重要な局面であると理解できる。実際に、アセスメントは介護保険のケアマネジメントや生活保護世帯の自立支援プログラム作成など、多様な実践領域で活用されている。それゆえ、地域生活定着支援においても、精神障害者のストレングス情報はまずアセスメントを行うことで、はじめて支援計画や介入場面での活用に結びつけることができると考えた。この発想については、カウガー（Cowger,C.D.）も「実践プロセスにおいてストレングス視点が中心的役割を発揮するのはアセスメントである」[4]と論じている。加えて、地域生活定着支援では、支援プロセスのなかで地域生活継続に必要な精神障害者のストレングス情報を、その変容状況も視野に入れて包括的に把握できるかどうかが鍵となる。それゆえ、その方法構築にあたっては、精神障害者のストレングスを継続的に情報収集・認識し、彼らへの支援計画や介入に反映させていくアセスメント、つまりストレングス・アセスメント*12)が糸口になると考えている。

⑵　ストレングス・アセスメントの実際

アセスメントは、継続的に認識する情報が利用者の計画や活動、評価など、支援全体の方向性や結果に影響を与える点で、ソーシャルワークの展開プロセスにおける重要な局面である。この特性をふまえると、精神障害者の地域生活定着力であるストレングスは、まずアセスメントにおいて認識されることで、支援計画や活動、評価での活用に結びつくことになる。つまり、精神障害者がストレングスをうまく活用して地域生活定着できるかは、ストレングス・アセスメントにかかっているのである。

しかし、ヘップワースとラーセン（Hepworth,D.H. & Lassen,J.A.）によると、現実には「ソーシャルワーカーが、弱さでなくストレングスに働きか

けるというソーシャルワークの決まり文句を高く評価してきたにもかかわらず、その一方で、利用者の病理や障害に焦点をあてたアセスメントを定式化することに固執してきた」[5] 経緯がある。そこには、問題志向のアセスメントが病理や障害などの問題を具体的に言語化し、原因の特定や解決の方策をイメージしやすくさせてきた背景があった。また、こうした問題の一端には、これまでストレングス・アセスメントの概念研究において、その方法や手続きが具体化されてこなかったことも関係している。このことに関してはカウガーも、ストレングスが哲学や理論の点で充実しているものの、実践に組み入れるための方法、指針、ノウハウの欠けた概念であると述べている*[13]。芝野松次郎も、一般にソーシャルワーク理論が概して高い抽象性をもち、直接実践に結びつくことの少ない特性を有していると指摘している。それゆえ彼は、理論自体が支援者の実践活動を具体的に導くことの難しさを指摘したのである*[14]。これらをふまえると、ストレングス・アセスメントが直接実践に反映されない要因は、概念自体の「抽象性」にあると考えられる。その結果、方法、技術、技法が十分に示されず、実践での活用にかげりが生じている。

こうした理論と実践の乖離に対して、芝野は「実践の意義を説き、実践に根拠と方向性を与えるだけではなく、ソーシャルワーカーに対して具体的な援助の手続きを示唆してくれる『実践理論』が必要」[6] であると主張している。そこで、ストレングス理論においても実践との乖離を避けるため、これまで多くの研究者がストレングス・アセスメントに着目し、その方法構築を試みてきた。たとえば、ラップとゴスチャ（Charles A. Rapp & Richard J. Goscha）は問題志向のアセスメントの課題をふまえ、その視野や考え方を明らかにしてきた（表１）。また表２のように、精神障害者への実践の積みあげから、彼らの目標達成にむけたストレングス・アセスメントの内容や実践プロセスの構成要素を提示したことには一定の評価ができる*[15]。しかしながら、それらは経験や実践事例との関係から手続きの要素を抽出しているにすぎない。つまり、彼らの研究では、ストレングスを発見する方法や、それを支援に活用する方法がみえないのである。同様に、カウガーも表３のとおり、ストレングス・アセスメントのガイドラインとして12の項目を提案している。しかしそれは、支援者にむけたストレングスを理解するうえでの諸注意とそのための行動指針となっており、支援プロセスのどこで何を行うのかという展開がみえてこない抽象的なものにとどまっている。このことから、ストレングス・アセスメントが実践に結びつかない要因の１つには、これまでの研究が支援対象の特性や支援課題に応じた方法やプロセスを具体化してこなかったことの問題が大きいと考えられる。

表１）ストレングス・アセスメントの内容[7]

①本人が望み、要求し、希望し、願望し、夢見るもの、人の才能、技能、知識。包括的な視野。
②利用者が置かれている状況の観点から情報を収集する。エスノグラフィー的アセスメント。
③対話的で目標にむけたアセスメントである。
④「今ここで」に焦点をあて、将来やこれまでどう生活してきたのかという過去についても話し合う。
⑤人は自己と環境において自分の望むものを決定する個人として尊重される。
⑥アセスメントは関係性が基盤にあり、継続的で完全なものでない。また、そのプロセスにおいて励まし、助言、承認は不可欠である。
⑦ストレングス・アセスメントは、人を個別化する点で具体的で詳細である。
⑧解決策として自然な支援ネットワークの活性化と形成をはかる。
⑨利用者が権威と参加意識をもつ。
⑩専門家は「あなたから何を学べますか」と尋ねる。

（先行研究をもとに筆者作成）

表2）ストレングス・アセスメントの構成要素[8)]

【ストレングス・アセスメント内容の構成要素】
1．ストレングス・アセスメントの内容は、利用者にとって意義ある重要な文脈のなかから集めるべきである。
2．ストレングス・アセスメントの内容は、利用者の意欲を引き出すものである。
3．ストレングス・アセスメントは、詳細かつ独自性のあるものである。
4．ストレングス・アセスメントで使われる言葉は、利用者の視点から利用者自身の言葉を使って書かれるべきである。
【ストレングス・アセスメント実践プロセスの構成要素】
A．ストレングス・アセスメントのプロセスは利用者のペースで展開されるべきである。
B．ストレングス・アセスメントは会話形式で行われるべきである。
C．ストレングス・アセスメントは可能な限り地域で行うべきである。
D．ストレングス・アセスメントは継続的なプロセスの一部であり、その情報は基本となる情報から更新されていくものである。

（先行研究をもとに筆者作成）

表3）ストレングス・アセスメントのガイドライン[9)]

①利用者が現実を理解するために卓越したものを与えること
②利用者を信じること
③利用者のニーズを理解すること
④個人と環境のストレングスに対するアセスメントを行うこと
⑤多次元のストレングスのアセスメントを行うこと
⑥独自性を発見するためにアセスメントを用いること
⑦利用者が理解できる言葉を用いること
⑧アセスメントをワーカーと利用者との共同の活動にすること
⑨アセスメントにおいて相互の同意に達すること
⑩非難や批判をしないようにすること
⑪原因と結果で考えるのをやめること
⑫診断ではなく評価すること

（先行研究をもとに筆者作成）

一方、日本の精神保健福祉領域の研究では、地域生活定着支援におけるストレングス視点の必要性や、ストレングスを用いた実践の意義を明らかにしたものにとどまっており、その課題に沿った実践方法に言及したものがほとんどみられない。ゆえに、病理や欠損を言語化し、その解決方法を具体化してきた問題志向のアセスメントと比較して、ストレングス志向のアセスメントは実践のなかで十分浸透していかないのではないかと考える。

3．精神障害者の地域生活定着支援におけるストレングス・アセスメントの方法

(1)　地域生活定着支援におけるストレングス・アセスメントの問題

ストレングス･アセスメントの概念の抽象性は、支援者が情報収集・認識を行うストレングス・アセスメント実践の問題にも派生する。なぜなら、概念のなかで方法やプロセスが体系的に確立されていなければ､支援者の価値や力量､経験値に頼った実践にならざるを得ないからである。そのため、従来のストレングス・アセスメントは、支援者が精神障害者のなかにあるストレングスを見い出し、その強みを引き出しながら、精神障害者本人による生活問題の解決を側面的に支援していくものであった*[16)]。そしてそこでは、精神障害者を人間として対等にみるが役割の違う存在として理解し、彼らをあくまで情報提供者としての役割でとらえ、対話というような同じ立場でのかかわりが行われていなかった*[17)]。結果、精神障害者のストレングスに関する情報収集や状況理解は支援者に任され、精神障害者自身がストレングスの発見や活用にかかわることなく、支援者の把握した情報をもとに支援計画や介入が行われてきたのである。

こうした精神障害者の参加しないストレングス・アセスメントは、精神障害者が支援者からの支援やサービスに、一方的に頼ってしまう地域生活を営む危険性を孕んでいる*[18)]。そしてそれ

は、精神障害者が入院生活と同じような「患者」としての受動的な地域生活や、本人の望まない地域生活を余儀なくさせられる結果を導く。たとえば、家族の干渉の強さゆえ、自分の望む地域生活が送れなかった精神障害者Ｖ氏のケースを例にしてみたい。このケースでは、長期の入院生活から感情表現や意思表明の乏しさがあったＶ氏に代わり、Ｖ氏のサポートに積極的な家族に対して支援者が情報収集し、支援計画やサービスの調整を行っていた。具体的には、Ｖ氏の疾患を理解する家族の関係性やサポートを、Ｖ氏の地域生活を支えていくストレングスと認識してしまった。そして、支援者はそこでの情報をもとに、家族との同居や福祉サービスの非利用を決定したのである。そのためＶ氏は、趣味活動をして自由にひとり暮らしをしたいという希望をもっていたものの、それを支援者に伝えることができなかった。結果、Ｖ氏は希望を叶えるための地域資源とつながれず、必要最低限の医療サービスと限られた生活範囲のなかで生活を送ることになったのである。

こうした支援結果には、Ｖ氏の生活状況やストレングスなどの情報に対して、Ｖ氏と家族、支援者との認識にズレの生じていたことが大きく関係している。そして、Ｖ氏と家族、支援者との認識のズレは、同じ目標や認識から支援ができない、あるいは支援のための協力が得られないという状況を引き起こし、Ｖ氏の望む地域生活の実現に重大な影響を及ぼしてしまったのである。しかし、この問題の本質は、精神障害者に本来考える力や語る力があるにもかかわらず、Ｖ氏自身がストレングス情報を理解したり情報共有するなどして十分参加できていなかったことにある。つまり、Ｖ氏がストレングス・アセスメントに参加し、彼の主観的情報と支援者の客観的情報が共有されていれば、両者のズレを修正した情報にもとづく支援が展開でき、さきのような結果は避けることができたと考えられる。それゆえ、精神障害者の地域生活定着支援の実現には、支援者と協働でのストレングス・アセスメント方法の提案が不可欠であると考えている。

⑵　精神障害者との協働によるストレングス・アセスメント方法の必要性

一般的なアセスメント概念に対して、ストレングスの視点や理念に焦点化したストレングス・アセスメントは、情報収集や状況理解において、支援者に利用者のもつ強さや資源への注目を促すという点で大きな意味がある。さらに本稿では、ストレングス・アセスメントのプロセスに精神障害者が協働者として参加することなくして、彼らの自己実現や課題達成にむけたストレングス活用が結実しないことも指摘してきた。そのためには、精神障害者の語るストーリーにある強さに着目し、それを彼らと支援者との協働で活用していくストレングス・アセスメントのプロセスが重要と考えている。このことに関して、志賀文哉も、利用者がストレングス支援のプロセス全体をとおして、協働者として支援者とともに目的を共有し、その達成にむけて参画することを期待された存在であると主張している*19)。また、精神障害者が協働者としてアセスメントに参加することは、自身の能力を発見する機会と、今後の問題解決に取り組むことのできる潜在的能力の活性化や新しい能力の開花を導く機会にもなる*20)。これらのことをふまえると、ストレングス・アセスメントへの精神障害者本人の参加は、彼らが自分の力を信頼し、周囲の資源を選択的に利用しながら自分の望む地域生活定着を実現していく支えになると考えられる。

また、ストレングス・アセスメントへの参加経験は、これまで他者から押しつけられた否定的なストーリーに支配されていた精神障害者が、自らのストーリーを肯定的にとらえ直す機会にもなる*21) ため、彼らにとって自分の強さ、能力、達成を実感する、自己認識の再構築プロセスとなる*22)。そして、彼らがこれまでの経験や能力を肯定的に認識できることは、地域生活を自らコントロールしていくための基盤となる自己効力感、自己信頼などのストレングスを強化することにも結びつく*23)。これらのことをふまえると、精神障害者が協働者としてストレングス・アセスメントに参加することは、それ自体が地域生活を継続

するうえでの重要なエンパワメントとなる。そして、このエンパワメントの経験は、精神障害者が自らの生き方を自分で選択し、その結果に責任をもちながら自己実現や自分らしい地域生活を送るための基点となるのである*24)。

さらに、精神障害者と支援者との協働作業によるストレングス・アセスメントは、その後の支援の方向づけや判断、決定場面での精神障害者の参加をもたらす一助にもなる*25)。なぜなら、これまで精神障害者が自己決定の能力を有していた*26) にもかかわらず、そこに参加できていなかったのは、情報提供や情報交換場面へのアクセスの乏しさゆえ、彼らが決定や評価できるだけの情報量をもてなかったからである。それゆえ、アセスメントの段階から精神障害者本人がかかわることは、こうした問題を払拭することを可能にする。つまり、これまで経験することのなかった協働者としての役割は、精神障害者がアセスメント以降の支援計画や介入、支援評価などのプロセスに参加する動機づけとなるのである。そして、支援プロセスへ主体的に参加し協働する体験を積み重ねることは、彼らにとって新たな自分の潜在能力への気づきや、自信の醸成など、彼らのストレングスを引き出すことにも結びつく*27)。

これらのことをふまえると、精神障害者との協働によるストレングス・アセスメントは、地域生活定着にかかわる精神障害者の潜在的な力を引き出し、彼ら自身の主体的な支援参加と地域生活を実現することに大きく貢献する。しかしながら、ストレングス・アセスメント自体に当事者である精神障害者が参加していくための方法は、いまだ示されていない*28)。たとえば、地域生活支援の実践において、アセスメント・ツールやガイドラインにストレングスの視点や内容が導入されるようになってきた一方で、それらは支援者の利用や果たす役割を想定したものに限られている。さらに、支援者はストレングス・アセスメントで得られた情報を自らの思考のなかだけで分析しているため*29)、言語化して精神障害者と共有するまでに至っていないことが多い。実際に、こうしたストレングス支援では、利用者自らがニーズやストレングスを認識し、支援決定や介入の場面で支援者に表明できる場合には、一定の効果をあげることができる*30)。しかしながら、ニーズやストレングスの認識、また意思表明が難しい利用者には、本人の認識と支援者の支援決定にズレの生じることもあるため*31)、十分な効果が期待できないのである。

こうした状況をふまえると、日本の地域生活定着支援の実践においては、ストレングス・アセスメントの内容や手続きを具体化することにとどまるのでなく、より精神障害者との協働を強調した新たな「協働ストレングス・アセスメント」の方法構築が求められているといえよう。

おわりに

本稿では、支援者が地域生活継続にかかわる精神障害者の潜在的な力を引き出し、彼ら自身の主体的活用を導くストレングスを具体化する方法としてアセスメントに着目して、考察を進めてきた。とくに、ここでは第一に、精神障害者の特性や地域生活定着の課題をふまえ、精神障害者と支援者との協働による新たなストレングス・アセスメント方法を構築するための研究を進めていったのである。具体的には、広くソーシャルワークの支援プロセスでストレングスを活用するために、情報収集、状況理解を行う機能を有する中心的局面としてのアセスメントに着目し、ストレングスと関係づける試みを行った。さらにそこから、従来のストレングス・アセスメントにおける問題点や、日本の地域生活定着支援における課題を整理し、そこに精神障害者本人の積極的な参加と、支援者との協働作業による展開が必要不可欠であることを提唱したのである。

しかし本稿では、理論的整理から、地域生活定着支援において精神障害者との協働によるストレングス・アセスメントが必要であることを示しただけにすぎないため、その具体的な内容や方法の構築は依然として重要な課題のままである。そこで今後は、継続的な理論研究と実践現場での示唆の積み重ねから、地域生活定着支援において実践可能な方法へと精緻化させていきたいと考えてい

る。

〈脚注〉

＊１）拙稿「類似概念との比較にみるストレングスの意味　―精神障害者の地域生活定着支援の視点から―」『福祉社会研究』15号　2015年　京都府立大学公共政策学部福祉社会研究会

＊２）Cowger,C.D. “Assessing Client Strengths: Clinical. Assessment for Client Empowerment” *Social Work* Vol. 39 Iss. 3 1994 National Association of Social Workers pp.264-265

＊３）熊澤利和「精神障害者の地域移行・地域生活支援の課題と政策（１）」『地域政策研究』第17巻第４号　2015年　高崎経済大学　p.81

＊４）拙稿　前掲書

＊５）田中和彦「アセスメントプロセスにおける若手 PSW の困難さ　―研修の方向性の模索―」『日本福祉大学社会福祉論集』第130号　2014年　日本福祉大学　pp.40-41

＊６）神山裕美「ストレングス視点によるジェネラリスト・ソーシャルワーク　―地域生活支援に向けた視点と枠組み―」『山梨県立大学人間福祉学部紀要』Vol.1　2006年　山梨県立大学　p.2

＊７）芝野松次郎「ソーシャルワークの実践と理論をつなぐもの　―実践モデル開発のすすめ―」『ソーシャルワーク学会誌』第23号　2011年　日本ソーシャルワーク学会　p.4

＊８）同上　p.3

＊９）Jonathan P. & Greta B. *Social Work Practice: Assessment, Planning, Intervention and Review 4th ed.* 2014 Learning Matters p. 9
齊藤順子「ソーシャルワーク実践におけるアセスメントをめぐる課題　―相談機関におけるアセスメントを中心に―」『日本社会福祉実践理論学会研究紀要』４号　1996年　日本社会福祉実践理論学会事務局　p.60

＊10）中村佐織『ソーシャルワーク・アセスメント　―コンピュータ教育支援ツールの研究―』2002年　相川書房　p.40

＊11）原田聖子「ニーズ・アセスメントとソーシャルワークの存在意義」『東洋大学大学院紀要』第47集　2010年　東洋大学大学院　p.141

＊12）Charles A. Rapp & Richard J. Goscha *A Recovery-Oriented Approach to Mental Health Services 3rd ed.* 2012 Oxford University Press pp.96/113

＊13）*Ibid.* p.94

＊14）芝野松次郎　前掲書　p.1

＊15）Charles A. Rapp & Richard J. Goscha *op.cit.* pp.105/110

＊16）志賀文哉「支援と当事性」『とやま発達福祉学年報』第４号　2013年　富山大学人間発達科学部発達教育学科発達福祉コース　p.12

＊17）西村愛「社会福祉分野における当事者主体概念を検証する」『大原社会問題研究所雑誌』No.645　2012年　法政大学大原社会問題研究所　pp.37-38

＊18）福山和女「医療・保健・福祉領域での協働のあり方　―医学的リハビリテーションにソーシャルワークの視点を援用して―」『総合リハビリテーション』38巻12号　2011年　医学書院　p.1157

＊19）志賀文哉　前掲書　p.13

＊20）中村佐織　前掲書　pp.99-100

＊21）狭間香代子「エンパワメント・アプローチにおけるストレングス視点の意味」『社会福祉実践理論研究』第９号　2000年　日本社会福祉実践理論学会　pp.71-72

＊22）Charles A. Rapp & Richard J. Goscha *op.cit.* p.128

＊23）久保美紀「ソーシャルワークにおける当事者主体論の検討　―援助されるということへの問い―」『ソーシャルワーク研究』Vol.40 No.1　2014年　相川書房　p.31

＊24）西村愛　前掲書　p.35

＊25）中村佐織「第４章　援助の戦略と技術　２　エンパワーメント戦略と技術」太田義弘・秋山薊二編著『ジェネラル・ソーシャルワーク　―社会福祉援助技術論―』1999年　光生館

p.128

＊26）斎藤敏靖「精神障害者にとって『自己決定』とは何か？」『新潟青陵大学紀要』第５号 2005年　新潟青陵大学　p.21

＊27）丸山裕子「第３章　支援ツールの意義と目的」太田義弘・中村佐織・石倉宏和編著『ソーシャルワークと生活支援方法のトレーニング―利用者参加へのコンピュータ支援』2005年 中央法規　p.56

＊28）小林恵一「ソーシャルワークにおける利用者参加の可能性について　―八千代市母子生活保護世帯自立支援プログラムにおけるツールの開発を通じて―」『福祉社会開発研究』２号　2009年　東洋大学　pp.106-107

＊29）山口圭「ソーシャルワーク・アセスメントのプロセスが結果に反映されない要因」『聖学院大学論叢』第21巻　第３号　2008年　聖学院大学　p.315

＊30）三品桂子「精神障害者のケースマネジメントとストレングズ視点　―実践を通したストレングズ視点の検証―」『ソーシャルワーク研究』Vol.27　No.1　2001年　相川書房　p.39

＊31）大谷京子「ソーシャルワークにおけるアセスメント　―ワーカーの認識とスキル―」『日本福祉大学社会福祉論集』第130号　2014年 日本福祉大学　p.20

〈引用文献〉

１）中村佐織『ソーシャルワーク・アセスメント―コンピュータ教育支援ツールの研究―』2002年　相川書房　p.57

２）同上　p.49

３）同上　p.99

４）Cowger, C. D. “Assessing Client Strengths: Clinical. Assessment for Client Empowerment” *Social Work* Vol. 39 Iss. 3 1994 National Association of Social Workers p.264

５）Hepworth, D.H. & Lassen, J.A. *Direct Social Work Practice: Theory and Skills 2nd ed.* 1982 The Dorsey Press p.167

６）芝野松次郎「ソーシャルワークの実践と理論をつなぐもの　―実践モデル開発のすすめ―」『ソーシャルワーク学会誌』第23号　2011年 日本ソーシャルワーク学会　p.1

７）Charles A. Rapp & Richard J. Goscha *A Recovery-Oriented Approach to Mental Health Services 3rd ed.* 2012 Oxford University Press p.95 Table5.1 Assessment Comparison

８）*Ibid.* pp.105-115

９）Cowger,C.D. *op.cit.* pp.265-267